

目次

CONTENTS

総論

楊 曉捷

デジタル人文学の現在
本書の解題をかねて
001

第 1 部

デジタル環境の出現と普及

大場利康

図書館が資料をデジタル化すること
国立国会図書館のデジタルアーカイブ
019

村田良二

だれでも楽しめるデジタルアーカイブを目指して
国立文化財機構「e 国宝」
036

海野圭介

電子資料館事業の現在と未来
国文学研究資料館のデジタルデータベース構築
055

千本英史

小規模大学での地域に密接した画像公開の取り組み
奈良女子大学「奈良地域資料画像データベース」の場合
069

小松和彦

魅力的なデータベースとは何か
日文研の怪異・妖怪関係データベースをめぐって
081

研究ノート

楊 曉捷

日本古典画像資料を含む主なデジタルリソース
092

第 2 部

人文学諸分野との融合

荒木 浩

〈国文学〉のミレニアム
レトロ・プロスペクティブなデジタル元年
099

藤原重雄

史料校訂に関わるデジタル環境
114

田良島 哲

デジタル時代における博物館コレクションの表現
歴史的な視角から
133

山田翼治

傑作はどこへ消えた？
デジタル複製による文化財の置換問題を考える
144

千本英史

デジタル画像における史料改竄の問題
被差別地域の地名表記の問題をめぐって
160

研究ノート

楊 暁捷

「ウイキ絵巻」開発記
179

第 3 部 | 明日のデジタル人文学へ |

赤間 亮

デジタル・ヒューマニティーズと教育
人材育成の必要性とデジタルアーカイブのサステナビリティ
189

大向一輝

Linked Open Data と学術・文化情報の流通
205

森 洋久

持続可能なデジタル・アーカイブの可能性
221

小峯和明

『日本常民生活絵引』の再生
〈絵画物語論〉のために
237

石川 透

デジタル社会における奈良絵本・絵巻研究
254

大谷節子

「頼政」面を溯る
能・狂言面データベースの可能性
263

楊 暁捷・小松和彦・荒木 浩

あとがき
285

執筆者一覧
289

sample

デジタル人文学 の現在

本書の解題をかねて

楊 暁捷

現在、デジタル技術は強烈な旋風を巻き起こし、社会生活の姿を隅々まで変えようとしている。日々激しく進化する環境と、それがもたらした変化のありよう、そこに見る数々の課題をめぐり、ここに小さな一冊をまとめた。この本が取り上げているのは、デジタル技術と人文学の出会いと融合であり、「デジタル人文学」の現状とその未来像である。

新しいデジタル環境は伝統的な人文学諸分野におけるほとんどありとあらゆるものを表現の対象として取り込んでおり、この新技術の有効性を示している。これに対して、人文学の研究は、新たな記録や伝達の方法を得て、目を瞠^{みは}るような変貌を迎えつつある。この

ように形成され、展開していく「デジタル人文学」のあり様は勢い激しく、周りへのインパクトは大きいですが、一方では基本にかかわる要素があまりにも定まらない。そのため、しばし立ち止まり、足元の道筋を確かめ、方向を見定めることが必要であろう。

デジタル環境の出現

今日のデジタル人文学の全容をどのように捉えるべきだろうか。たとえば、人文学を対象としたデジタル技術やデジタル環境を積極的に活かした人文学の諸分野における開発や利用にかかわる具体的な数字を集め、分析するような試みも考えられよう。しかし、そのような数字は、一つひとつのプロジェクトの規模を示し、その様子を伝えられても、そこからデジタル人文学の全容を掴むことは、おそらく叶わない。デジタル人文学への認識は、個々のデータに絞ってゆくようなものではなく、むしろそれとは逆に、一步下がって距離を保ち、デジタル環境の形成と展開のあり方を巨視的に眺めるべきだろう。

デジタルと人文学との出会いとデジタル環境の形成は、まったく新しい媒体の応用という意味では、しばしば遠昔の紙の出現に喩えられる。紙がそれまでの記録媒体だった竹簡、パピルス、羊皮紙を置き換えていくという、緩やかでいて、しかしけっして後戻りをしない確実な過程、その一つひとつの局面の苦労やその結末の効果を想像してみれば、メディアの変化という歴史的な転換をたしかな具体性をもって思い描くことが可能かもしれない。そのような着想に刺激されつつ、ここではデジタル人文学の様相を思い切って単純な

図式で捉えてみよう。デジタルという新しい媒体の出現、応用、発展という3段階の構図である。すなわちデジタル媒体にこれまでのメディアに記録されたものを取り入れたり、新たな内容を制作したりして伝播させること、デジタルを用いた記録や表現と人文学諸分野の融合により、在来の人文学に反省と発見をもたらすこと、さらにデジタル人文学そのものが発展し続けること、という三つのステージに分けて観察するものである。

第1のステージであるデジタル媒体の出現と確立において、新しい媒体は、これまでの長い歴史で蓄積されてきたありとあらゆる記録を貪欲なくらいに取り込み、すべてをデジタルの形に置き換えようとする。過去に作られた記録は、文字や画像の形態での資料が圧倒的に多い。ここで、これらの文字・画像資料のデジタル化への取り組みにおいて、日本とアメリカなど英語圏の国とは興味深い違いを見せていることに触れておきたい。紙媒体の文献のデジタル化にあたり、アメリカでは、電子ブックをサービスとして捉える「google」、書籍販売の「amazon」、電子図書館の「ebrary」、インターネット情報保存の「Internet Archive」など、多種多様な営利あるいは非営利の団体が活躍し、しかもその対象は英語文献に止まらず、日本語のものまでかなりの規模で取り入れている。これに対して、日本では違うアプローチが取られている。デジタル化の中心を担っているのは、図書館、美術館、研究機関といった国立、公立の組織であり、それを推し進め、サポートするのは主に公共の資金なのである。このような日本的モデルとでも言えるようなデジタル環境の展開は、営利活動と一線を劃し、著作権などの対応にも細やかに配慮するなど、注目すべき特徴を提示している。

第2のステージである人文学への応用は、デジタル媒体の確立とともに、それと平行する形で進められている。そもそもデジタル技術は、その実用性と有効性が認められて導入されたものである。伝統的な人文学の要望に応え、その思考に添いながら、デジタル技術のそれぞれの発展のステージに合わせてさまざまな方法が案出され、実現され、応用された。この過程において、デジタル人文学の規模が日増しに大きくなり、デジタル媒体の実用性と実効性が広く認識されるようになる。そのため、在来の人文学の各分野からの期待が日増しに顕著になってくる。デジタル機械に慣れ親しむ若い世代から、アナログの環境に育ちながらもこれを新しい道具として覚えていく世代の研究者までが積極的にこれを用い始め、国レベルのプロジェクトから小さな研究グループにいたるさまざまな規模において、在来の学問とデジタル環境との融合が見られるようになったのである。

第3のステージは未来への展開である。デジタル技術の可能性が現段階においてすべて現れたと考えるには程遠い。それどころか、これからさらに変化が加速度を増し、予想もつかない新たなものが現われ、デジタル人文学がいつそう進化することが容易に想像できよう。人々が日常に用いる端末ツール一つを取り出してみても、小さなサイズに凝縮した携帯電話にしる、画面上を指で操作するタブレットにしる、新しい機械の出現やその普及がデジタル環境全体に確実に影響を与えている。中でも記録媒体としてのデジタルの役目は、その歴史があまりにも短いだけに、その個々の技術の持続可能性(サステナビリティ)をつねに直視せざるをえない。これに慎重に対処できなければ、どんなに精力的に取り組んだ開発や研究も、その成果の存続が脅かされる。ただ、技術の流動や環境の変化を理由に

デジタル人文学への取り組みを怠り、変動が止むまで傍観することは、もはや不可能である。すでに起こったことを丹念に分析し、予測可能なことを手がかりに発展を見極め、さらにつぎなる展開に積極的に寄与しなければならない。このような作業は、人文学に携わっている多く研究者たちにとっては、とりもおさずデジタル環境の形成に貢献することであり、未来にかかわる大事な規則作りに参加することを意味する。

以上のようなきわめて総体的に捉えた三つの段階と、それぞれの変化の特徴は、紙がそれまでの媒体を置き換えた時代においてもおそらくきっと現われていたに違いない。しかしながら、かつて100年単位で進行していたことは、現在のデジタルという媒体の場合になると、まったく悠長に構えていられない。大きな変化や発展の局面を、今日のわれわれは10年あるいは1年単位で経験させられ、その対応に緊迫感を感じずにはいられない。

学問としてのデジタル人文学

「デジタル人文学」というテーマは、とうぜん人文の学問、すなわち学術研究を含む。歴史、文学など伝統的な人文学の諸分野の課題が次々と提出され、デジタルと人文学の融合が研究の対象となり、様々なアプローチが試みられ、段階的な、時には飛躍的な進歩が見られてきた。

新技術の開発と在来の研究課題との接近、そして学問としての取り組みは、デジタル技術が普及の兆しを見せ始めたころからすでに始まっていた。その間の移り変わりを物語る具体例として、まず情

報処理学会の研究報告誌である『人文科学とコンピュータ』が想起されよう。1989年5月にその第1巻を発行したこの学会誌は、2013年に入って第97巻を刊行し、過去25年にかけて計800本に近い研究報告を世に問うた。技術の開発と応用、そして伝統的な研究分野からの新たなデジタル環境への期待や実践にかけての弛みない努力が積み重ねられてきた。

このデジタル技術の激しい変化に対応して、わずか二十数年の間に人文学の各分野における数多くの成果が生み出された。それらの成果の一つひとつは当時の技術水準を色濃く反映している。日本史や古典文学の分野に関連して2、3の実際例に触れてみよう。1990年代の半ばごろ、インターネットはいまだ人々を繋げるだけのものに過ぎず、情報を集積して発信するリソースになっていなかったため、デジタル情報は主にCD-ROMなどのメディアを用いて伝播されていたのである。この時代における象徴的な成果には、CD-ROM版の『新編国歌大観』(1996年)や『群書類従』(1997年版)などがあげられる。さらに「源氏物語」、「平家物語」や歌舞伎など古典文学・文化の代名詞的なものを対象に、教育や古典の普及に重きを置いた電子出版物も刊行され、文字テキストや注釈解説に加えて、画像、朗読、動画、ビジュアル仮想世界など多彩な試みが施された。一方では、デジタル環境の出現により、それまでには思いもつかなかった課題への模索も行われた。電子テキストの完備を受けて展開された源氏物語をめぐる計量分析、画像処理や文字認識などの計算技術に基づく古文書かな文字認識や古文書翻刻支援システムについての研究などは、その代表的なものだろう。これらの研究成果やそのアプローチのありかたは、新しい技術と環境の有効性を強力に証明し、本書で取り

上げる現在の代表的なデジタル環境の構築と達成と、根底において繋がっており、あえていえばその基礎を作り上げ、限定した規模において貴重な実践例を示したものだだった。

デジタル人文学は、在来の書物のありかたとさまざまな関連を持ちながらその姿を形成したと言ってよい。紙に印刷された在来の書物に対して、デジタル成果にはおよそ二つの流れが見受けられる。一つは、在来の書物という形で刊行されたもの、あるいは刊行されるものを枠組みにして電子化したものであり、もう一つは、デジタルの特性から出発し、これまでには存在しなかったような形態の情報を最初から制作するものである。前者は全集、シリーズもの、画像資料のデジタル化に代表され、対して後者には、音声、動画、3次元画像などのデジタル情報の生成に具体的な例を見る。とりわけ後者の場合について、横断検索することを前提とするさまざまなテーマのデータベース、地形や有形文化財などの3次元記録、ソーシャルネットワークなどを含む日常生活のさまざまな活動をめぐるデータ収集など、デジタル媒体の特性を基礎とするものが脚光を浴びている。これらのデジタル情報の多くは、書物のような記録媒体に置き換えることが現実的に、また理論的に不可能である。

デジタル人文学の研究活動は、同時に伝統的な学問のあり方やその評価にも少なからずインパクトをもたらした。学術活動の中心的な形態は、学説の公表、検証、さらなる発展と捉えることができよう。人文学諸分野において、それはまたとりわけ個人名に結びつく。これに対して、ほとんどのデジタル技術にかかわるプロジェクトは異なる知識を持つ研究者による文理の枠を越えた協力が必要とされ、環境の激しい変化により成果の更新が要求され、かなりの完成を見

せたものでも、その継続性を保障する日常的な運営が必要とされる。さらに技術の変化により、かつて利用できたものの消失も実際に起こる。これらに対して、人文学における成果評価の主流は、いまなお伝統的な出版形態に集中している。このような評価の枠組みを見なおし、デジタル人文学の研究成果を客観的で正確に捉え、記述することは、研究環境を向上させる重要な課題の一つである。

本書の成立と全体構成

本書は、これまで述べてきたデジタル人文学の現状と発展を正面から取り上げる。

計16篇の報告と論考の執筆者は、歴史、文学など人文学の中核を成す分野や文理にわたる情報学の研究者から、デジタルシステムの設計・開発の責任者、さらに電子事業の設計・運営を含む機関全体の行政管理指導者に至るまで、互いにかなりかけ離れた立ち位置を持っている。執筆者たちに共通しているのは、デジタル人文学の最前線に身を置き、それぞれの形で実践に加わっており、名実ともにそれぞれの分野のトップランナーということである。たとえば直接デジタルシステム開発や運営に関わった執筆者による、いままさにフル稼働し続けているそれらのシステムの数々は、そのまま現在の日本でのデジタル環境の達成を反映し、日本語による文献が置かれているデジタル環境としてはまさに最高の到達点を示している。これらの執筆者が一同に集った本書は、まさに新しい分野としてのデジタル人文学の現在、それが情報流通や学術研究に及ぼす影響、やがて迎えるさまざまな展開を象徴するものと言えよう。

本書執筆者は、それぞれの論考に着手するまでまる1年にわたる共同研究を行ってきた。2011年秋より、国際日本文化研究センター主催で計6回の研究会が設けられた。研究メンバーは各自の分野から自身が関わった研究、携わった事業などをめぐるテーマを持ち出し、それを報告して全員で議論し尽くすというのが、研究会のスタイルだった。違う立場ながらも共通した認識を語り合い、また、隣接あるいは同じ分野に立脚しながらも互いに異なる見解をぶつけ合い、時にはかなりかけ離れた分野の研究者に基礎的な知識から説明を求めなければならなかった。研究会の席上で投げかけられた素朴な疑問、交わされた遠慮のない批判、求められた冷静な反省などを含めて、真剣で真摯な交流と議論は、研究者各自の問題意識を共有させ、それぞれの課題へのアプローチを深化させた。

このような経緯を経て成立した本書の諸論考は三部に分かれる。さきには環境のありかたを出現、応用、発展という三つの段階として観察したが、それに従い、同じ3段階の捉え方を用いて本書の全体構成を組み立てた。すなわち三部それぞれのテーマを、デジタル環境の現状とその達成、伝統的な人文学研究分野への衝撃や個別分野からの批判と反省、さらに次なる発展のための課題と展望と設定した。

デジタル環境の現状

第1部は、「デジタル環境の出現と普及」と題する。

ここで取り上げているのは、デジタル環境の実現に向けて、新しい技術を取り入れるための公共機関の取り組みであり、それを牽引

する図書館、美術館、研究所、大学などにみられるさまざまな実践のあり方である。報告されている国立国会図書館のデジタル事業、国立文化財機構の「e国宝」、国立国文学研究資料館の電子資料館事業は、文字通り日本のデジタル事業の現在の到達点を意味し、国を代表する最大の規模を誇るものである。これに対して、奈良女子大学が制作した「奈良地域関連資料画像データベース」は、地方に保存されている人文学資源を対象にし、一つの教育機関が果たせる役割を実際に示し、データベースの収録点数こそ先の三つと比較して少なくとも、一流の古典文献に新しい技術のスポットライトを当てることで、デジタル化のもう一つの道筋を示してくれた。この部の最後の一章では、国際日本文化研究センターで制作、運営されている怪異・妖怪関係の二つのデータベースを取り上げた。文字や画像資料のデジタル化に止まらず、特定の分野におけるこれまでの研究を総点検し、それをデジタル技術の特徴を生かして再構築したものである。すでに紙媒体には還元できないデジタル記録としての研究の結晶であり、未知の発見に繋がるものである。このように、この部ではデジタル事業の現場を紹介し、これまで存在していなかった新しいリソースの構想、作業の過程、配慮と対策などが詳しく記されている。いずれの場合においても、技術の進歩に伴ったさらなるデジタル環境の変化にも十分対応できる基礎が築かれており、その成果はこれからも長らく用いられるだろうと断言できよう。

デジタル環境の進歩は、一方では期せずして在来の関連機関の性格をユニークな角度から浮き彫りにした。ここで述べられているのは、図書館、美術館、研究所と大学である。新しい環境に対応するにあたり、それぞれが持っている社会的な役割から出発しなければ

ならない。一つの明らかな対照となっているのは、図書館と美術館だろう。それをつぎのように極端に単純化して捉えられよう。ともに知的財産を取り扱い、これを1人でも多くの人に利用されることを目標としながらも、図書館は複数に印刷された書籍の1点を用いるのに対して、美術館は唯一の1点を保有し、保存する。したがって所蔵に対して自ずとそれぞれのアプローチを持つものである。結果的に社会利用という軸においてデジタル環境に直面し、デジタル化することを合言葉に、図書館も美術館もこれまでの物理的な空間から大きな一歩を踏み出した。その結果、デジタル画像、文字や音声のデータベースなどまったく新しい性格の情報を産出し、これまでの読者、来館者に加えて、顔の見えないユーザーにまで対象を広めた。言い換えれば、新しい性格の情報の制作と、新しい交流チャンネルの開発と運営管理という、いずれもまったく新しい分野を取り入れることで、伝統的な社会的な役割からの大きな展開をなしたのである。いうまでもなく、このような状況は、デジタル環境における大学や研究所などの公共機関についてもまったく同じことがいえる。

デジタルがもたらしたもの

第2部は、「人文学諸分野との融合」と題する。

ここでは、デジタル技術が既成の人文学諸分野にもたらした衝撃、そしてデジタル技術への忌憚のない批判や期待が述べられる。いわばデジタル環境の向こう側に立脚し、新しい環境が成立し、それが確かなる影響を形成しつつあるがために、この歴史的な展開への真

剣な問いかけが生まれているのである。

この部の前半の3章は、それぞれ長い研究の伝統をもつ文学(「国文」、歴史(「国史」、博物館学の立場から論じられている。デジタル環境への真摯な思考、新メディアの出現に伴う変化、そして研究や実践のありかたへの真剣な内省が記されている。一つの新しい環境を分析するためには、100年単位で積み重ねられてきた伝統的な研究分野に立脚しつつ、そのような分野自身への厳しい見つめなおしが必要となってくることは、いわば自然な展開である。伝統的な分野、その歴史の中で培ってきた視点や手法は、学問としての最大の強みであり、社会の大切な財産である。新たな環境に晒されたとしても、簡単に乗り越えられるものではなく、またそうであってはならないものである。これと同時に、そのような伝統的な学問分野は、長い歴史を持っているからこそ、新しいものを積極的に吸収して自身の栄養とするだけの生命力を持っていることもまた明らかである。

この部の後半の2章は、デジタル環境にある新しい社会生活の中から二つのやや特殊なテーマを取り上げた。文化財の複製と古地図の応用という、いまだ完全な普及や利用の完成形に至っていないが、デジタル技術と人々の日常生活との緊密な接点を具体的に提示している事例である。二つの論考が問題にしているのは、文化財展示における原作品の置き換えと、デジタル古地図にみる地名表記の改竄という現象である。輝かしい達成とかつてない可能性の裏に隠されて見過ごしがちだが、見逃せば取り返しの付かない結果につながることをめぐり、冷静な指摘とともに、建設的な提言が述べられている。デジタル環境は、非常に有効で、そのインパクトがあまりにも強いがために、その使い方をいっそう慎重に見つめることが要求さ

れる。これまでにはかつてなかった実践を試行しているとのことを忘れず、良識ある警告、期待を込めた提言に傾聴すべきだろう。

さらなる発展のために

第3部は、「明日のデジタル人文学へ」と題する。

ここには、さらなる変化や発展の未来に向けて、デジタル人文学の可能性や辿るべき道筋を考察する、いくつかの違う立場からの提言が集まった。五つの論考は、デジタル技術そのものを正面から取り扱い、あるいはデジタル環境をゆるやかに取り囲むものをテーマにした。

真っ先に取り上げるのは、教育という課題である。新しい分野を開拓するために、それを担う人材の育成が要求され、伝統的な領域に跨る教育の実践の必要性が問われる。このような時代の要求に応じて、「デジタル・ヒューマニティーズ」の課程を開設し、専門の知識をふんだんに取り入れるカリキュラムを設計し、地域に密着した精力的な実践を通して若い世代の育成に取り組んだ構想や経験が示されている。古典文学へのアプローチを身に着けながら、同時にデータベースの構築など先端的なデジタル技術を用いた実践もこなせるという、これまでの教育システムではおよそまったく対応できない知識構成をつぎの世代の研究者に大胆に期待するものである。これへの真剣な取り組みが教育機関全体に及ぶような変化をもたらすだろうとの指摘が含まれている。

続いて、デジタル技術に基づく新たな情報の生成と表現の仕方がクローズアップされる。とりわけインターネットで公開されている

データへのアクセスと特定の用途のための情報構造の仕組みと応用、デジタル・アーカイブの現在とそのあるべき姿という二つの課題が具体的に論じられた。この二つの論考は、突き詰めて言えば、これまで膨大に貯蓄され、しかも凄まじい勢いで増え続けるデータへの対応を、対照的な二つの立場から述べたものである。前者は、これからますます脚光を浴びるに違いない「ビッグデータ」の魅力や応用の一端を見せてくれた。さまざまな用途や異なる経緯によって集まったデータ群を対象に、特定の使用目的に沿ってそれにアクセスし、使用に役立てるように取り出すことは、これからのデジタル環境で当然のように要求されることだろう。一方では、これとは逆に、きわめて明確かつ限定された目的のもとで制作されたデジタルデータが時間とともに急激に増え、いろいろな形で保存(アーカイブ)されている。これらのデータの多くは、丁寧に制作された分、特定の技術に依存し、そのような技術の更新や変化の中でどのように存続させていくかが大きな課題となる。二つの論考は、ともに具体的な事例を提示しながら、デジタル環境の影響力、潜在的なインパクト、予想される展開などを明晰に解説した。

この部の最後は、絵画資料、古典芸能を対象とする3編で締めくくった。古典画像の代表格である絵巻と絵本をめぐる2編は、「絵引」というアプローチを手掛かりにこれまでの研究史を振り返りつつ、方法論的にデジタル環境への提言をし、それを支える物語論への明快な道筋を述べ、また奈良絵本・絵巻についてはデジタル技術をフルに応用したプロセスやそれによる新たな発見の実例を記述した。続いて能面研究をテーマとする論は、能面データベースの設計やその利用にかかわるものを、一面の面をめぐる推理や追跡に併せ

て展開した。古典の研究はけっして文字文献に止まらない。そのため、絵と文字との境界、有形と無形との連続が課題となる考察の中で、関連の情報を知る、記録する、伝えるためにデジタル環境の寄与の可能性が具体的に示されている。

デジタルのある未来へ

いうまでもなく、本書で取り上げた成果や課題は、デジタル人文学の現在のほんの一部分に触れただけにすぎない。デジタル人文学をめぐるさまざまな実践や、それへの理論的な取り組みは盛んで、おそらくどんな形を用いてもその成果をすべて網羅することはできないであろう。一方では、ここに記されている構想、苦勞、反省、そして今後ますます広く利用されるようになる成果への喜びは、デジタル環境の開発や進歩に努める研究機関や個々の研究者とともに共有できるものと信じていたい。

デジタル環境の進化は、まさに止まるところを知らない。ここで各論として取り上げてきた内容に沿って考えていても、デジタル環境をめぐる量から質へ、漸進から飛躍への展開を占うことができるだろう。図書館や美術館で行われているデジタル公開は、いまだ各自に所蔵、所有しているものを対象とするが、この境界はすぐにも打ち破られ、日本語によるもの、歴史上に残されてきたすべてのもの、ひいては人類すべての文献がアクセスできるようになることだろう。研究作業においても、デジタルデータベースを検索することは関連文献に目を通すのと同じようにきわめて基礎的なものとなり、やがてどんな研究にとってもその入り口になる違いない。そし

てデジタル環境が身近なものとなるにつれ、まるで文字の読み書きが普及したのと同じく、データベースを構築したり、専用のサイトを立ち上げたりすることは、文章を一つ書き上げるような感覚で普通にこなしていき、かつ学術論文を丁寧に吸収するのと同じように評価されることだろう。これらの状況は、どれも空想ではなく、すぐそこまで来ているものではなかろうか。

人々の社会生活に与えるデジタル環境の影響は、どんなに見積もっても過大評価にはならないだろう。再び紙の出現というメタファーを持ち出すとすれば、今日のわれわれは、まさにデジタルという名の紙を造り、その質を止まることなく向上させながら、在来のすべての記録をこれによって書き写し、置き換えようとしているのである。しかもそれと同時に、新たな媒体を手に入れたという興奮を表わすかのように、目まぐるしい勢いで新たな情報を作り出している。これまでの文明の歴史に対して、デジタル技術は新しく、これをめぐる実践の歴史は浅い。この強力なツールを覚えながらすこしずつ使いこなし、その可能性を確かなものにしながらも絶えずそれを進化させていくことは、この時代に居合わせた人々が宿命的に直面せざるをえないことだろう。

デジタル人文学の道のりは、まだ遠い。現在の立ち位置を確認し、さらなる発展のための思考の抛り所を提供することで、この小さな一冊がデジタル人文学の未来への一つの道しるべとなることを願いたい。